## 現地通信

# タイ国新国立図書館を訪ねて

石　井　米　雄

### 1

わたくしは，去る5月8日京都を出発，同日，ふたたびバンコクの土を踏んだ。今年の3月，センターの第2期計画について，現地研究機関と意見を交換するため，農学部の四手井綱英教授と，この国を訪れて以来，ちょうど38日ぶりである。

こんどの訪タイの目的は，東南アジア研究センターの「ビルマ・タイ研究計画」昭和41年度事業計画の一環として,「タイ国における，いわゆる農奴制(Phrai)と奴隷制（That）の崩壊過程」を，タイ語文献，とくにタイ国国立図書館所蔵の未刊資料によって調査することと，あわせてバンコク連絡事務所の仕事をすることである。

文献調査という仕事の性質上，今回のタイ国滞在は，その大半が，あの古ぼけた「ワチラウット文庫」と「ワチラヤン文庫」の薄暗い部屋のなかで過ごすことになるだろう，というのが，出発前のわたくしの予想だった。

ところが今度来てみると，5月5日というから，わたくしの到着するわずか3日前に，新しい国立図書館が完成し，タノム首相を迎えて，盛大な開所式を終えたばかりであることを知ったのである。

わたくしは，さっそく新図書館を訪ねてみることにした。場所はバンコクの西北隅，チャオプラヤー河に面したター・ワースクリーである。最近すばらしく立派になったシー・アユタヤ通りを西に進み，国会議事堂を右手に眺めながら，ラーチャダムヌン大通を突っ切ってサムセン通りに出ると，やがて左手に，タイ洋折衷様式の，堂々とした白亜の建物が目にとび込んできた。敷地は大分ひろびろとしている。20ライもあるだろうか。タイ風の，鋭角的な赤瓦の屋根が，強い南国の日ざしに照り映えて，まばゆく輝いている。王宮前広場の砂ぼこりが，容赦なく吹き込んできたこれまでの図書館とはけた違いの立派さだ。わたしは新しい仕事場の完成を心から嬉しく思う。

### 2

タイ国の「国立図書館」の歴史は，今世紀の初めにさかのぼる。1905年，チュラロンコン大帝ラーマ5世王は，先帝モンクット王の生誕100年を記念して，王宮のなかにタイ国最初の公開国立図書館を開設する。これが「国立ワチラヤン図書館（Ho Phrasamut Wachirayan samrap Phranakhon，英語名：The Vajirañana National Library)」である。

この図書館は，その成立の母体として，既存の3つの文庫をもつ。「ワチラヤン御文庫」，「仏教文庫」，「王室経蔵」がそれである。

「ワチラヤン御文庫(Ho Phrasamut Wachirayan，英語名：The Royal Vajirañana Library)」は，新図書館にその建物を継承した点と，蔵書の内容の点から見て，その後の図書館の発展に，最も大きな影響をのこしている。「ワチラヤン御文庫」とは，1884年，ラーマ5世王が，父王の遺徳を偲んで，王宮の中に開設した一種の「図書クラブ」で，王族や高級官吏が会員であった。「ワチラヤン」という呼称は，モンクッ

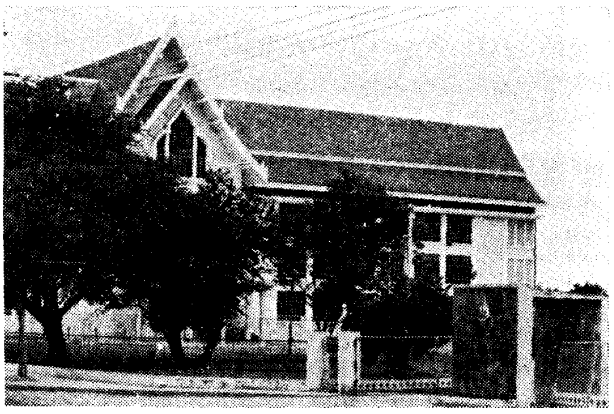

**写真1**　ター・ワースクリーの入口から新国立図書館をのぞむ

ト王が，即位前，僧籍にあったときの名にちなんだものである。この「御文庫」の蔵書は，当時市販されていたタイ語書を購入したもののほか，会員がそれぞれ持ちよってあつめた外国書などが主なものであったという。

「仏教文庫（Ho Phutthasasanasangkhaha)」というのは，もと，バンコクのベンチャマボピット寺院（いわゆる大理寺寺院）の学僧の研究のためにと蒐集した仏教典籍（各国版大蔵経など）をもとに成立した文庫で，1900年，さきの「ワチラヤン御文庫」の一隅をかりて開設されている。

「王室経蔵（Ho Monthiantham)」の歴史は古く，その建立は遠くバンコク遷都の昔にさかのぼる。ラーマ1世王の行なった仏教経典の「結集」は著名な史実であるが，この経蔵には，その時完成した三蔵の原本が納められていた。ラーマ5世の手で印刷刊行され，わが国にも多数もたらされた「タイ王室版パーリ経典」は，この経蔵所蔵の原本を底本としたものである。

以上3つの文庫の蔵書をあわせてつくられたものが「国立ワチラヤン図書館」である。タイ国初の公開国立図書館となった元「ワチラヤン御文庫」の建物が，手狭な上に，機能的でなく，種々不便であったことは，開設の当初から関係者によって指摘されていたところであった。そこで1916年，ナー・プラタート通りにターウオンワット館と呼ばれる新しい建物が出来上ると，「ワチラヤン図書館」は，さっそくここへ移転することになった。こうして，国立図書館がはじめて王宮の外に出て，民衆にとっても近づきやすい存在となったのである。

タイ国の図書館が，ラーマ5世のイニシヤティヴで生まれたことは上述のとおりであるが，タイの王室が，図書館事業にどれほど大きな関心をもったかということは，歴代の図書館長の顔ぶれにはっきりと現われている。初代館長のワチラウット親王は，やがて即位してラーマ6世となった。2代目のソモット・アモーラパン親王，3代目のダムロン親王は，ともにタイ国きっての学者であり，王族としての身分も高い。

1925年，ラーマ6世王が崩御されると，この文人王の全蔵書が，王位を継いだ弟王の手で，ワチラヤン図書館に寄贈された。ときの図書館長ダムロン親王は，これを機会にワチラヤン図書館の大改革を実行し，まず，その蔵書のうち，碑文をふくむ一切の写本をシーワモークピマン宮（現国立博物館構内）にうつし，これを「ワチラヤン文庫」と名づけた。一方蔵書のうちの刊本と，新しく目録に加えられたラーマ6世王旧蔵書とを，これまでの建物にのこし，これを改名して「ワチラウット文庫」と呼んだ。爾来，「国立ワチラヤン図書館」は，刊本の「ワチラウット文庫」と写本の「ワチラヤン文庫」の2つの文庫に分れることとなったわけである。

**写真2**　国立博物館の一部となっているシーワモークピマン宮，碑文が納められている

1933年，芸術局が新設され，国立図書館の業務一切が芸術局の管理に移されるにおよんで，「国立ワチラヤン図書館」は，「国立図書館（Ho Samut haeng Chat，英語名：The National Library)」と改称され，今日におよんでいる。

1947年には，ダムロン親王の蔵書の譲渡をうけて，「ダムロン文庫(Ho Samut Damrongrachanuphap)」が附設された。

図書館の利用者の数は，とくに第2次大戦以後，漸増の一途をたどっているといわれる。事実，280人しか収容できない「ワチラウット文庫」は，熱心な利用者がいつも廊下まであふれていた。蔵書が充実するにつれ，書庫もすでに飽和状態をこえてしまっていた。もともと4,000冊で出発した図書館が，そのままの広さで14万冊にふくれ上ったのであるからまことに当然の話である。こうした事情を背景として新国立図書館建設の必要は大分以前から叫ばれていたが，1961年頃からようやく具体的な準備にとりかかり，1963年には定礎式にこぎつけ，そしてこの度，ようやくにして開

**写真3**　ダムロン親王の蔵書をおさめたダムロン文庫

所のはこびとなったわけである。

### 3

新国立図書館は，バンコク市ドゥシット区のター・ワースクリーにある。ター・ワースクリー，つまりワースクリー舟着場というのは，王室御用艇専用の舟着場で，宮内庁の「舟運部」がここにある。図書館の敷地は直接チャオプラヤー河には面していないが，しばらく耳をすましていると，ポンポン蒸気の音が，のどかにひびいてくる。バンコクも西北のはずれに近く，町の中心からは大分遠いが，読書にはふさわしい環境だ。テーウェート運河をはさんで，南側にはタイランド銀行，タイテレビ局などが立ち並んでいる。

今度完成したのは図書館の本館と附属講堂あわせて16,000m² で，27,200m² の敷地の中央に横L型に建てられている。将来この右手に「国立文書館（Ho Chotmaihet haeng Chat, 英語名：National Archives)」と，「王立アカデミー（Ratchabanditsathan)」とが建てられる予定と聞く。

建設費4億3,000万円という本館および講堂は，それぞれ5階および4階建。エアコンディションの設備は一部にかぎられているが，風通しがよく，天井が比較的高いのでなかなか涼しい。

正面玄関を入ると，中央ホールに受付がある。閲覧希望者は，ここで閲覧票を作成してもらわないと閲覧室に入れない。NRC（National Research Council of Thailand）発行の身分証明書を提示すると，すぐに閲覧票を作ってくれる。閲覧票作成には，自動車の運転免許証に貼るのと同じサイズの 3cm×3.5cm の写真1枚が入要である。

出来上った閲覧票をもって，早速閲覧室をのぞいてみる。各閲覧室の入口の受付に閲覧票をあずけると，開架式の書庫に自由に出入りして，好きな本を読むことが出来る。ただし図書の館外持出しは許されない。マイクロフィルムサーヴィスが，この欠点を幾分なりとも補ってくれる。撮影料は一駒が15サタン（≒2円70銭）とのことだった。

1階の右手は，「新聞・雑誌閲覧室」である。タイ国内で発行される定期刊行物は，すべてここに納めることが義務づけられているそうであるが，さすがによく揃っており，保存もよい。バックナンバーの装訂も行き届いている。内務省発行の≪Thesaphiban≫なども1906年の第1巻から完全に揃っているし，官報も，1858，1874～1879，1888～と全部 available である。これはちょっと他所では望めない。

1階の左手は「一般図書閲覧室」である。辞書類，言語，美術，古典，小説，歴史，地理，紀行，伝記，理学，工学など，タイ語，外国語（圧倒的に英語が多い）の本がいろいろと並んではいるが，絶対数が不足しており，少なくともわれわれ外国人研究者にとっては一番魅力のない部屋である。

2階へ上ると，中央のホールに2組のカード箱がおかれている。右がタイ語，左が外国語（大半が英語）で，当図書館の全蔵書の総合カードが，著者名，著書名，件名の3種類に分けて納められている。カードの右肩の記号でただちに格納場所がわかる仕組になっているのは便利だ。分類はデューイ10進分類法によっている。

向って右手の閲覧室は「宗教・哲学・社会科学」である。社会科学はまだまだ貧弱で，やはり仏教関係，とくに各国版パーリ三蔵がこの部屋の中核をなしているといえよう。

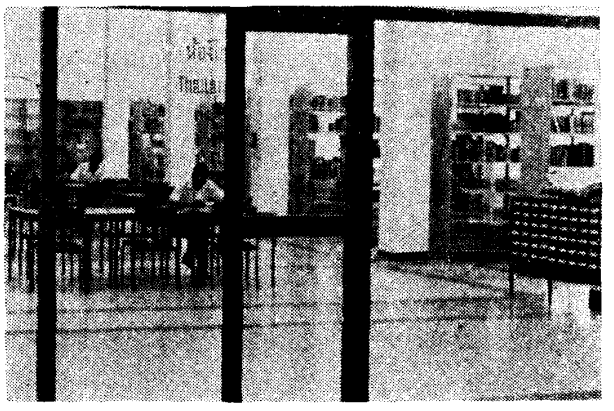

**写真4**　新国立図書館の内部，タイ国関係図書閲覧室

2階の左手は「アジア関係図書閲覧室」である。英語書が大部分。それもインド，ビルマ，セイロンなどが中心となっていて，たとえば中国関係などは，1段ぐらいしか見当らない。この辺の充実を望みたいところである。

3階の「タイ国関係図書閲覧室」こそは，この図書館のいわば本命であろう。タイ語だけでなく，タイ国関係の外国語図書がすべてこの部屋にあつめられている。ただし貴重書に属するもの（たとえば1873年版のブラドレー博士著タイ・タイ辞典）などはこの部屋の開架式書棚にはなく，4階の貴重書書庫（ここへ入るには特別の許可がいる）にしまってあるので，カードによって検索の上，係員に申し出なければならない。書棚を一見すると，あまりにがらがらなので一瞬失望しかけたが，カードをくってみて安心した。さすがによく揃っていて，町では手に入らない Nangsu Chaek なども，ほとんどあるようである。なおこの部屋におさめられている Nangsu Chaek のうち，国立図書館が版権を所有しているものについては，印刷後一定の部数の納入を定められており，これを3階の「販売部」で安く入手できることを知っていると，何かと便利である。

3階の右手は「参考資料室」。各種の写本が要領よく展示されていて勉強になる。

4階へ上るには館長の特別の許可が必要である。ここは2つに仕切られ，左手には各種の貴重書が，右手のエアコン設備のある部屋には，Manuscript and Inscription Section の管理の下にある各種写本（Bai Lan および Samut Khoi）が分類整理されている。

5階は倉庫で，蔵書の余部が入れてあるという。

各部屋を廻ってみての印象では，とにかく移転をようやく終えたばかりで，整理に目下全力をあげている最中という感じであった。しかし，いずれにせよこれだけの施設が完成を見たということだけでも，タイ国立図書館史上，画期的なことと言わねばなるまい。タイ研究の今後の発展のため大いに慶賀すべきことである。なおこの図書館は祝日のほかは一切休日なし，毎日8時30分から16時30分まで利用できることを附記しておく。

# メサリアンの谷より

飯　島　　茂

タイ国における乾季の終りを告げる恒例のソンクラーンの祭りがやってくる。なかでもとりわけタイ国北部では毎年4月中旬になると，人びとは気狂いのようになってこの水祭りを祝う。この地方の3～4月におけるぱさぱさに乾ききったひどい暑さを経験しないと，水祭りの本当の楽しさは解らないだろうし，この祭りに示すタイ人の爆発的なエネルギーの根源がよく理解できないであろう。

ソンクラーンの祭りは元来春分の日を祝うタイ国の旧正月で，ビルマの水祭りとは同系統のものといわれる。この日は仏像，僧侶，両親，長老などに敬意と祝福のしるしとして，水をかけるしきたりがある。国王も宮中でみそぎを受けられ，町角では人びとがおたがいに水をかけあう習慣が古くからおこなわれている。しかし，バンコクではその慣行が過熱しすぎて首府としての機能がおちたり，外国人に迷惑だというので，現在は禁止されている。

だが，水祭りは北部各地方では今日でもたいへん盛んに祝われる。とりわけ古都チェンマイのソンクラーンは有名である。そこでは洋裁用の小型の霧吹きや手製の水鉄砲による可愛い放水から，果てはトラックに

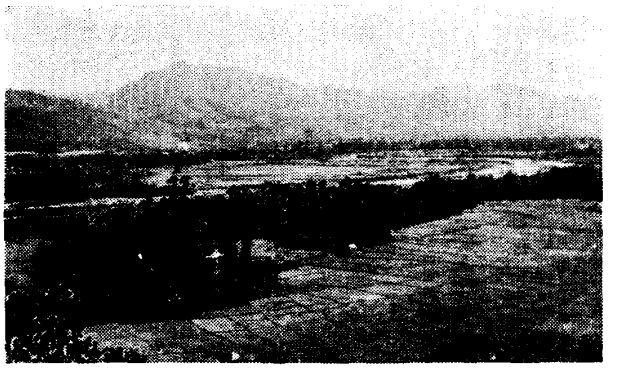

**写真 1**　メサリアンの谷，手前の林はティカニ村